

●講演

# 本多庸一をめぐる人々——明治という時代

## 梅津順一

### 目次

---

- 一. はじめに
- 二. 武士からキリスト者へ
- 三. 自由民権とキリスト教
- 四. 明治の青春——YMCA夏期学校にて
- 五. 世界の中の日本——キリスト者の使命
- 六. まとめ

### キーワード

---

本多庸一 (Honda Yoitsu, 1849-1912)  
明治時代 (the Meiji era)  
弘前藩 (Hirosaki Han)  
横浜バンド (Yokohama Band)  
自由民権運動 (The Freedom and People's Rights Movement)  
青山学院 (Aoyama Gakuin)

●LECTURE

Honda Yoitsu and the Meiji Era  
by JUNICHI UMETSU

## 一、はじめに

今日は、本多庸一シリーズの最終回になります。第一回は、気賀健生名誉教授が、本多庸一の信仰と生涯全般をお話しくださしまして、第二回は、深町正信名誉院長が、牧師、メソジストの教会指導者としての本多庸一を取り上げました。第三回は、嶋田順好学院宗教部長が、本多庸一の信仰の特徴を考えてくださり、前回は、若手の研究者を代表して教育人間学部の佐々木先生が、本多の教育思想を論じてくださいました。今回のテーマは「本多庸一をめぐる人々——明治という時代」で、ちょっと漠然としております。私は当初、明治の歴史の中に本多庸一の業績を位置付けてみたいと考え、このような表題にいたしました。

第一回は総論、本多庸一の全体像としますと、第二回のテーマは、監督、教会指導者本多庸一で、第三回は、信仰者本多庸一でありまして、第四回は教育者、青山学院院長本多庸一であります。では、今回取り上げる本多庸一をどういうべきか。私は、明治時代に本多はどのように生きたかを考える上で、「国土」本多庸一ということでお話ししたいと存じます。「国土」というのは、日本国の将来を考え、日本国のために働くことを使命と考えた人物といえると思います。本多庸一は優れた牧師として尊敬を集め、メソジスト教会を整えるのに尽力し、青山学院をはじめ明治のキリスト教学校のために貢献した。しかし、本多はそれだけではなく、教会の外に目を向け、学校教育の目指すものを考え、教会を通し、学校を通して、新しい日本国の建設のために尽力した。そのような意味で本多庸一は確かに国土でありました、それも単なる国土ではなく、「クリスチャン国土」であったのです。

明治という時代は、国土を必要とした時代です。と申しますのは、明治以前、江戸時代、徳川幕府と三百の藩によって統治されてきた時代には、藩士はいたけれども、国土はいなかった。武士たちは代々藩主に仕えてきた。武士と一口に言っても、上は家老から下は足軽まで上下の階層があったわけですが、人口の比率として武士は家族も含めて6パーセントとか7パーセント。その少数の人たちが、農民や町人たちを支配していました。武士たちは、藩主に忠誠を尽くし、藩の安泰、藩の繁栄に尽力したわけですが、日本国全体のためにという意識はなかった。まったくなかったわけではないかも知れませんが、大部分の人は藩の外への意識は薄かった。

それが開国に伴う社会的な混乱の中で、徳川家よりもっと高い権威を中心に日本国を再編成しようという運動が起こってきた。徳川幕府は三百年近く続いてうまく機能しなくなってきている。ここは天皇家を中心に抱いて、尊王思想を基盤にして徳川体制を打倒し新しい体制を作り上げようとした。結局、その運動が勝利して明治維新を迎えることになったのですが、では実際に天皇中心の政府とはどのような政府かについては、確たる見通しはありませんでした。維新の当時、福澤諭吉は幕府の外務省のようなところで翻訳とか通訳の仕事をしていたのですが、新政府ができたときに、新政府で仕事をするようにとお呼びがあったのですが、断っています。その理由の一つは、尊王思想を掲げた維新政府は、もう一方で、攘夷、すなわち開国反対を掲げ、外国勢力を打ち払えともいっている、そんな乱暴なことをいう人たちとは一緒に仕事ができないと考えたのです。

このように維新政府が右に行くか左に行くかわからない時に、これからは西洋諸国との交際は不可避である、西洋の進んだ文物を積極的に学ばなければならないと考えた人たちがいた。20歳で維新を迎えた弘前藩士の本多庸一もその一人で、明治三年に藩から派遣されて横浜に向かっています。それが翌年に廃藩置県となり、本多は藩という後ろ盾を失って弘前に帰るのですが、一年後、今度は本多家の財産を処分して資金を確保し、横浜に向かいました。本多はアメリカ人宣教師から英語を学ぶことになりますが、そこで一歩進んで、キリスト教に入信することになります。どうして英語を学ぶだけで満足できずに、西洋の宗教を求めたのか。当時、キリスト教はまだ禁制でありましたから、キリスト教に入信することは危険なことでした。それにキリスト教には邪教、人を惑わす教え、外国人が日本人を惑わす教えとして根深い警戒感がありました。

それがどうしてキリスト教を受け入れたのか。今日では想像することが難しいのですが、本多庸一は自分自身の魂の救いのためというだけでなく、新しい日本国家を作るため、立派な日本国を建設するためにキリスト教を受け入れたのです。これまでの藩士という視野を超えて、日本国全体に貢献したい、日本国の独立を守り、日本を立派な近代国家として建設するために自分は貢献したい。日本が文明国となるには、文明国の宗教、キリスト教を必要とする。自分自身もキリスト者となってイエス・キリストに従う、そのことで、日本国をよりよく作り上げたい。それが本多の抱負でした。ここにキリスト教国士本多庸一が誕生することになります。

本日の私の話は、まず本多庸一がキリスト教国士となった経緯をお話しし、その上でキリスト教国士としての本多の活動を、明治十年代の弘前での地方名士としての活躍、明治二十年代におけるキリスト教教育者としての役割、それに日清日露を背

景とした国際的な場面での活動と、順を追って取り上げてみたいと存じます。また、本多の活動の特徴は個人プレーではなく、さまざまな人々の協力によって事柄を成し遂げようとしたことにあります。主題の、本多庸一をめぐる人々というのは、本多とともに歩んだ人々を指しています。クリスチャン国士としての本多は何を為そうとしたのか。同時代のプロテスタント指導者たちの言動も踏まえ、明治の歩みと本多の歩みを重ねながら、クリスチャン国士本多の足跡をたどっていくことにしたいと存じます。

## 二、武士からキリスト者へ

明治初年、弘前藩の若武者本多庸一は、横浜に出て宣教師に英語を学んだだけでなく、キリスト教を受け入れて、クリスチャン国士となった。この本多と同じような精神的な経路をたどって、クリスチャンとなった人々は、横浜バンドと呼ばれています。今日ではバンドというと、ロック・バンドなど音楽のグループを指しますが、当時クリスチャンの間で、横浜で入信したグループが横浜バンドと呼ばれたのです。同じ時期、横浜で英語を学んだ人々は数百人はいたといえますから、その内でキリスト教を受け入れたのは少数の人びとでした。その少数の人びとは、多かれ少なかれ、本多と同じように、クリスチャン国士であって、自分の信仰というだけでなく、キリスト教を土台に新しい日本国の建設に貢献したいと積極的な意欲をもった人々でした。

今日教会で決心して洗礼を受けようとする人が、日本国を救うために自分は洗礼を受けたいといったら、みんなびっくりするのではないのでしょうか。では、この時代、どうしてそのような結びつきができたのか。このキリスト教信仰と国家建設の結びつきを理解するには、日本に來た宣教師たちが聖書の教師というだけでなく、文明の伝道者であったことを知る必要があります。日本の若い武士たちは宣教師から、英語だけでなく西洋文明を知ることができたのです。たとえば、幕末の時点で開港地横浜に最初に來たヘボン博士（James C. Hepburn 1815-1911）は、医師でありました。ヘボンは日本に來る前はニューヨークで医療活動に携わり、病院経営でも成功した人物でありました。社会の名声を得、経済的にも豊かになったヘボンは、若い日に抱いた世界伝道の心を抑えがたく、ニューヨークの病院や土地住居一切を処分して、日本にやってきました。ヘボンが横浜にやってきたのが、日米通商条約の一年後の1859年で、当然日本人への伝道は禁止されている状態で、無料で医療をはじめたのでした。それも漁師に施した目の病気の治療が劇的な効果をもたらしたことから、幕府の役人から却って怪しまれて、一時禁止されたこともありました。それが外国人居留地の整備とともに、医療活動も再開され、英語塾も開くことができるようになりました。へ



ボンの医療伝道は、キリスト教が文明社会の宗教であることを雄弁に示すものでした。

日本に來た宣教師の側にも、キリスト教だけでなく文明の知識を日本人に伝え、日本の国造りに貢献したいという積極的な意欲がありました。明治の初年に日本国家に貢献した宣教師にフルベッキ (G. H. F. Verbeck, 1830-1898) という方がおります。ヘボン來日の翌年に長崎に上陸した宣教師フルベッキは、ごく少数の人物に英語を教えることから活動を開始したのですが、幕府が長崎に設立した語学校で英語を教え、また同時に、佐賀藩が設立した学校でも教えています。この学校でフルベッキは、英語だけでなく、アメリカ憲法の講義をはじめ、政治や経済学、さらに国際法も教えています。フルベッキの門下生の大隈重信は、イギリスの外交官パークスと堂々と交渉したことから出世の足掛かりをえたのですが、大隈の活躍は一面ではその先生フルベッキのお蔭でありました。そのような関係で、フルベッキは明治の初年に新政府に依頼されて、東京大学の草創期に教頭として関わり、さらに明治政府の元老院の顧問として法整備などに協力し、また日本人留学生の世話などもしています。あまり知られていませんが、岩倉使節団の提案もフルベッキによるものでした。

フルベッキは後に日本政府の役職を辞して、宣教師に戻り伝道活動に尽力していますが、幕末にあって一宣教師が文明の学を教えて、明治新政府に貢献した例として興味深いものがあります。本多庸一に洗礼を授けたジェームズ・バラ (James Ballagh, 1832-1920) も、神奈川奉行所が設立した語学校で英語を教えていましたが、維新後は聖書を用いた英学塾を設立し、このバラに学んだ人々の間から最初の日本人のプロテスタント教会が設立されました。バラは伝道一筋の人で、地方伝道にも積極的に従事し、亡くなるまで60年近く日本に滞在しました。彼は「熱誠の人」で接する者により感化を与えた人で、学者としてよりも伝道を成功に導いたといわれています。本多も、バラ宣教師の熱誠に打たれて洗礼を受けています。当時バラ先生は日本語がまだ十分ではなく、本多は先生の話す聖書の話はよくわからなかった。ただし、その燃えるような祈りに心を打たれた。バラが涙をもって、学生たちのため、日本国の将来のために祈ったことは深く心に響いたのです。

涙を以て祈る、これはほぼ同じ時期に熊本洋学校で教えたジェーンズ先生 (L. L. Janes, 1837-1909) の姿でもあったようです。ジェーンズは宣教師ではなく南北戦争の退役軍人ですが、日曜には有志の学生を集めて聖書の学びを行いました。その最後にジェーンズは涙を以て、生徒のため、日本国の将来のために神に祈ったのです。アメリカから日本に來た宣教師の眼に日本の将来はどう映ったのでしょうか。当時アジアの国々の間で、独立を保っていた国は少なかったことを知る必要があります。日本

国がこれから独立を保ち、順調に国造りをする事ができるかどうかは決して自明ではなかったのです。アジア伝道の経験から日本が迎えるであろうさまざまな困難を予想できた宣教師から見れば、日本の将来は決して万全ではない、むしろ危うい。その中で、宣教師たちがキリスト教を伝え、文明を教え、涙を以て日本人の学生のため、日本国のために祈る姿がある、これには本多をはじめ横浜バンドの人びと、さらに熊本から同志社に進んだ熊本バンドの人びとも深く心打たれるところがあったのです。

文明の言葉を学び、文明の教えに接し、文明の宗教を受け入れて、日本国を文明国に作り上げたい、本多庸一をはじめ、横浜バンドの人びと、日本初代のプロテスタントたちは、このようにキリスト教信仰と日本国への献身とを結びつけたのでした。クリスチャン国土としての第一歩を踏み出すことになったわけです。その場合、横浜バンドの人たちには、明治維新において、幕府打倒の薩長側ではなく、幕府側についた藩の出身者が多かったと指摘されています。一時奥州列藩同盟参与した弘前藩の本多もそうですし、後に日本キリスト教会の指導者となった植村正久（1858-1925）はれっきとした幕府 1500 石の旗本の家柄、明治学院の院長となった井深梶之助（1854-1940）は会津藩家老の出身です。また、東北学院の指導者となった押川方義（1850-1928）は、一時長州藩と闘った伊予松山藩の出身です。これに対して、フルベッキの下で学んだ佐賀藩からは、まとまった形でクリスチャンは生まれていません。彼らは新政府のもとでさまざまな活躍の機会に恵まれていました。

福澤諭吉は廃藩置県後に、旧藩士たちをおそった精神的な危機を「モラル・タイの喪失」と呼んでいます。武士たちは、藩主への忠誠と藩の繁栄のために尽力しようと生きてきたわけですが、藩がなくなって、忠誠の対象を失い、職務を失ったことになります。「モラル・タイ」つまり道德の絆を失う、伝統的な人間関係の絆が切れてしまったわけです。藩主と家臣の関係もなくなり、家臣同士の上下秩序もなくなる。では、これからどう生きていけばよいのか。とりわけ若い武士たちは、精神的に路頭に迷うことになった。維新政府の近くにいたものたちは、新しい政府で立身出世の見込みがあり迷うことはなかった。しかし、維新の敗者たち、維新政府から遠くにいたものたちには、それがなかった。本多庸一をはじめ横浜バンドのクリスチャン国土たちは、藩主への忠誠をキリストへの忠誠に代えて、キリストに従う、その意味ではキリストの神の国の国土となりつつ、日本国の国土として生きる道を選んだのでした。

### 三、自由民権とキリスト教

では、クリスチャン国土となった本多庸一は、具体的に何をしようとしたのでしょうか。横浜バンドの仲間、植村正久や井深梶之助はそのまま横浜に残り、神学の勉強

をつづけたのですが、本多庸一は故郷の弘前に呼び返され、地域社会で活躍することになります。興味深いのはこの弘前時代に、本多庸一の活動のすべての側面が見られることです。本多は藩校の後身である東奥義塾の塾頭、事実上校長の役割を果たしました。弘前に帰るとき、本多は英語教師として宣教師イング (John Ing, 1840-1920) を伴っており、イングは東奥義塾で教えるとともに、教会形成に取り組むことになります。本多はイングと共に弘前で熱心に伝道し、教会を設立することになります。教育者とともに教会指導者として活躍したのです。さらにそれだけでなく、本多は仲間とともに「共同会」という政治結社を設立し、おりから全国の自由民権運動に呼応して、国会の開設のための運動に邁進することになるのです。この地方政治家としての本多の活動が狭い意味での国土としての本多庸一の面目を示すものですが、教育者、牧師の役割も含めて、クリスチャン国土としての本多の幅広い活躍があったといわなければなりません。

まず、教育者としての側面を考えます時、弘前には本多庸一自身が学んだ藩校「稽古館」がありました。稽古館で伝統的に教えられたのは中国の古典、儒教的教養に他なりませんが、維新後は英学教育の必要が自覚され、稽古館は一時弘前漢英学校として装いを改めます。しかし、中央政府の方針により旧来の藩主導の教育機関が廃止されますが、弘前の場合には、それが私立東奥義塾として存続することになります。東奥義塾という名前は、本多の盟友菊池九郎 (1847-1926) が慶応義塾で学んでいたこともあり、福澤の慶応義塾を意識して命名されました。この学校に本多庸一が塾頭として呼ばれ、宣教師イングを伴って赴任したことはすでに述べました。ほぼ同じ時期に、熊本ではアメリカ人教師ジェーンズを招いて熊本洋学校を設立し、アメリカ式のカレッジ教育を施しています。

熊本の卒業生のグループは、キリスト教指導者としては海老名弾正や小崎弘道など、熊本バンドとして知られる人材を育成していますが、弘前でもイングは、英語やキリスト教だけでなく、科学、数学、博物学、歴史を教え、また人格的な感化力もあって、続々と入信者が続きました。また、イングは東奥義塾の卒業生をアメリカの自分の母校に留学させており、その学生のなかから、珍田捨己 (1857-1929) など後に外交官として活躍する人物を輩出しています。ですから、本多を中心に、イングの指導のもとに育った人々を弘前バンドと呼ぶこともできるかも知れません。いずれにせよ、イングも狭い意味での英語の教師ではなく、また狭い意味での聖書の教師でもなく、文明の教師という側面がありました。イングは西洋の野菜や果樹の紹介者でもあり、とくにリンゴ栽培は青森県に根付き、特産物となったことはよく知られています。

本多が就任したのちの東奥義塾は、当時、地域の文化センター的な役割を果たしたことが注目されます。義塾には「博覧書院」という図書館を設立して一般に公開しています。また、『開文雑誌』や『学友通信』という雑誌を発行して、知的な交流に寄与しました。さらに、「博覧会」を義塾の講堂で開いて、旧家の秘藏品や武具、それに地方の物産などを展示しました。それに「文学会」を組織して、演説、討論を行い、会議のルールともいべき議事法の練習もさせたということです。今日の日本では、公開図書館も、雑誌も、博覧会も、文学会も、演説も討論もなんら珍しいことではありません。しかし、これらすべては徳川時代の日本には知られていなかったことで、このすべてが文明の諸事業に他なりません。これらすべては目新しく、新鮮で、価値あるものであったのです。

幕末から明治にかけて、福澤諭吉は『西洋事情』を書いて、西洋社会の紹介に努めました。西洋社会では当たり前でも、日本では想像しにくい社会制度についてとくに項目を挙げて説明している部分があります。そこで取りあげられているのが、まさしく「図書館」であり「博覧会」であり、「新聞」でありました。これらは伝統日本の上意下達の世界では必要とされず、一人一人が責任をもって社会形成に与る西洋社会に特有のものでした。誰にでも公開される図書館、自由な意見交換のための雑誌、博覧会によって知識見聞を広げること、さらには演説で人々に訴えることなどは、日本人にとってまったく新しい経験でした。福澤自身が『明六雑誌』を刊行し、また「演説館」を立てて討論会をもっていたことはよく知られていますが、そうした首都東京における文明の事業を弘前に持ち込んだのがクリスチャン国士本多庸一たちの事業であったわけです。

こうした文明への取り組みは、当然、文明の政治制度はどうあるべきかとの問題を提起します。西洋の政治制度はどうなっているかを紹介した福澤も、日本の政治制度はどうあるべきかについては、直接物申すことには慎重でした。新しい政治制度の提起は、一面では武力によって政権を獲得した明治新政府に対する反逆とも受け取られかねないものであったからです。とはいっても、いつまでも薩長の藩閥政府に物申さないわけにはいきません。文明の政治への運動は、民選議院の設立、すなわち国会の開設をもとめる運動として展開されていきます。弘前にあって本多庸一は全国の自由民権運動の広がりに対応するかのよう、「共同会」という政治結社を形成して、三千人の署名をもって元老院に国会開設の建白書を提出するまでに至ったのでした。

自由民権運動に詳しい歴史家の色川大吉氏によりますと、国会開設を求める運動は全国に幅広く展開していました。その運動を推進したグループは民権結社と呼ばれていますが、その民権結社は当時驚くほど多数設立されていました。色川氏らの研究に

よりますと、神奈川県に八十二社、茨城県に八十一社、埼玉県に三十社と、関東地域だけでも三百社を超える数があったといわれます。この数からすれば関東各地の市町村にはほとんどすべてのところで、民権結社が見られたことになります。民権結社では、あたらしい政治思想の学習をはじめ演説会を催すところもありましたし、いまでいう住民運動に類するものもあったようです。さらに、現在の東京多摩地区の五日市で行われた学芸講談会においては、月に二三回行われた定例の演説会には、近傍から二百人もの人が集まったといわれます。

色川氏は、弘前の東奥義塾を民権運動の学習結社の一つとして位置付けています。各地の民権結社の中には、殖産興業や農業の振興に取り組むものもありましたから、その点でも東奥義塾と共通するものがあったわけです。また、この時期、弘前と同じように地方に展開したキリスト教勢力と自由民権運動が重なり合うことも見られました。土佐の場合が有名ですが、自由党の指導者であった片岡健吉、中島信行といった人々がキリスト教に入信しています。キリスト者が先頭に立って自由民権運動を推進したケースがあったことは注目すべきことであるわけです。

弘前の本多庸一は、牧師にして地方政治家であったわけですが、牧師と政治家に共通するものとして、言葉、人々に話かけることでリーダーシップを取ることがあげられます。牧師でいえば説教、政治家であれば演説、これは明治の日本の新しい文化でありました。伝統的な日本の話芸には、講談、落語があり、宗教的な説話もありましたが、政治の場面で、演説をして人を説得する、人を動かす習慣はありませんでした。英米の世界では牧師の説教と政治家の演説には似たところがあるといわれます。ある雄弁で有名なイギリスの首相がいて、その人物がどのようにして雄弁を身に付けたかといいますと、日曜ごとの礼拝の説教だったといわれています。というのは、その首相が少年のころ、礼拝から家に帰ってきたおり、その父親が毎週、牧師の説教を復唱するように課題をだしたそうです。少年は毎週、牧師の説教を注意深く聞いて、午後には復唱する、それを続けて、見事な雄弁を身に付けたという逸話があります。今、アメリカの大統領選挙の季節ですが、来年〔2013年〕の一月には新しい大統領の就任演説がありますが、その就任演説にはヴィジョンを提示して人々を駆り立てるという点で、説教の調子があります。

弘前での牧師、教育者、政治家本多庸一の説教と演説は、英米の世界の伝統にふさわしいもので、まさしく当時の日本の文明の最先端をいったものでした。

#### 四、明治の青春——YMCA夏期学校にて

本多庸一の歩みでいいますと、明治19年に弘前を離れ仙台で一時伝道に携わり、

翌年の明治二十年には青山学院の前身、東京英和学校の教授および青山美以教会牧師に就任しています。ですから、本多の明治20年代の歩みは、青山学院とともに歩み始めた時期でもありました。また、その翌年明治21年から二年ほど、アメリカに留学しています。こう申し上げますと、本多は狭い意味での国士、すなわち政治に参与することで日本国の建設に貢献することを断念し、キリスト教の教育者、牧師の道を歩み始めたとの印象がありますが、必ずしもそうではありません。本多がアメリカにいた明治22年には大日本帝国憲法、簡単に明治憲法とよんでおきますが、明治憲法が発布され、翌年には第一回衆議院選挙が行われる運びとなります。そこで弘前では、衆議院議員候補者として本多庸一の出馬を求める声が湧き上がっています。

先に触れた弘前で本多の盟友菊池九郎は、アメリカに次のような趣旨の手紙を送ったといわれています。

「君——本多庸一を指します——は宗教家としてよりも政治家としての素質が備わっている。東京での君の送別会には、宗教家よりも政治家のほうがたくさん出席していたではないか。初期の議会は日本人の試金石として外国人も注目していることから、外国の事情に通じている君はまことに適任であると思う。このことは大にしては国家のため、小にしては東北のためにもなることだから、ぜひ立候補してほしい。」

当時菊池は初代の弘前市長に当選しており、市制の施行に奮闘していました。当然菊池もまた衆議院選挙の有力候補者であり、しかし、選挙区の関係から候補者は本多か菊池かに一本化する必要がありました。菊池のこの手紙は、自分は身を引くからぜひ出馬をという友情の手紙でもあったわけです。これに対して本多は、次のような趣旨の返事を書いたといわれます。

「県には政治家たる人は多いが、宗教家として献身的に働く人はいない。君——菊池のことですが——は長らく政界に活動し、その手腕力量からいって代議士として最も適任であるから、進んで立候補するのがよい。自分は一生宗教家として終わる決心だ。」

本多が宗教への道をたどることにした経緯は、アメリカでの鉄道事故を免れたエピソードが有名ですが、この菊池との友情も忘れられてはならないでしょう。菊池九郎は首尾よく第一回衆議院選挙で当選、その後連続九回当選し、国家の要職にも就いています。もしも、本多が政界に出ていたらどうであったか。後年、本多庸一が亡くなったおり、本多を追悼して、本多は大臣、あるいは衆議院議長にもなれたのではないかといった方がありますが、それは決して誇張でもお世辞でもなかったことは知っておいてよいことなのです。

明治二十年代、政治家としての道を断念した後の本多のクリスチャン国士としての活動を、「明治の青春——YMCA 夏期学校」という視点から考えてみたいのです



が、この言葉には多少説明が必要かも知れません。「明治の青春」というのは、当時さかんに語られた「明治の青年」からとりました。熊本洋学校で学び、同志社に進んだ人物で、近代日本を代表するジャーナリストに徳富蘇峰(1863-1957)という人物がおります。徳富は水俣の豪農の出身で、新島襄に傾倒し、はやくからジャーナリストを志し、二十代前半で『将来之日本』『新日本之青年』を刊行して、一躍注目される存在となりました。その徳富の『新日本之青年』は、新日本を作るのは青年であるとして青年の役割を強調するもので、当時の青年から熱狂的に支持されました。

その「明治の青年」とは、明治維新前後に生まれた人々で、彼らがいまや青年に達しつつある。明治維新を推進した伊藤博文とか山県有朋といった人々は天保生まれである。維新当時三十代であったその人々もいまや五十代、老齢に達している。新日本を建設するのは、そうした「天保の老人」に代わって、「明治の青年」である、明治の青年が「第二の維新」を遂行する、それこそが現在の課題であると徳富は訴えたのでした。この時期は、国会開設を目の前にした時期ですから、青年が積極的に政治に参加し、新しい日本を作り上げようという機運がありました。

この「明治の青年」は、日本で最初に西洋式の教育を受けた人々でした。弘前でいえば東奥義塾、熊本でいえば熊本洋学校、そうしたところで、アメリカ人による英語で西洋の学問の教育を受けた世代になります。それに彼らは日本最初のプロテスタント世代でもありました。本多の場合は「明治の青年」よりも年長ですが、ジェーンズ先生から教育された熊本バンド、それに札幌農学校でクラーク先生(William S. Clark, 1826-1886)の影響下にあった札幌バンドの人びとは、十代で英語で教育を受け、アメリカ人教師の薫陶を受けてキリスト教を受け入れるに至ったのでした。ですから、日本全体としては少数派ではありますが、まとまってクリスチャンを輩出した世代としては、「明治の青年」が最初であったわけです。その世代が成人に達しつつあり、さまざまな方面で活躍を開始し、新しい文化が生まれつつある、それがこの時期であったわけです。そもそも、青年という言葉自体が、YMCAのヤング・マンの訳語として生まれたのですが、青年という言葉には、人生を真面目に生きる、知性を鍛えてよく考える、社会的な責任感、社会的活動への意欲などを連想させる語感がありました。

そのYMCAの運動は、教会の外でのキリスト教活動として、イギリス、アメリカで盛んであったものですが、それが日本にも導入される。そのYMCAの重要な行事が夏期学校でありました。日本では、1889年に同志社で第一回の夏期学校が開かれ、全国からそれこそ五百人の青年が集まった。夏期学校は二週間続いたといわれます。まさしく、明治の青年、プロテスタント青年の熱気が伝わってまいります。翌年、第

二回の夏期学校は白金の明治学院で開かれたのですが、その様子については、当時、明治学院の学生であった作家島崎藤村（1872-1943）の文章が残されています。藤村の自伝的な作品『桜の実の熟する時』の一節ですが、そこには本多庸一をはじめ夏期学校に集まったキリスト教の指導者たちの姿が描かれています。

有名な文章ですので、ちょっと読んでみましょう。

「日本にあるキリスト教界の最高の知性をほとんど網羅した夏期学校の講演も佳境に入って来た。……チャペルの方へ行く講師の一人が捨吉たちの見ている前を通った。文科大学の方で心理学の講座を担当する講師だ……『M（元良勇次郎）』だ。

と菅はこごえて捨吉に言った。キリスト教界にはああいふ人もあるかと、捨吉も眼を輝かして、沈着な学者らしい博士の後姿を見送った。

続いて旧約聖書の翻訳に携わったと言われるアメリカ人で日本語に精通した白髪の神学博士（フルベッキ）が通った。同じく詩編や雅歌の完成に貢献したと言われ、宗教家で文学の評論の主筆を兼ねた一致教会の牧師（植村正久）が通った。今度の夏期学校の校長で、東北にその人ありと言われ、見るからに慷慨激越な気象を示したある学院の院長（押川方義）が通った。破鐘のような大きな声と悲しい沈んだ声とで互いに夏期学校の講壇にたって、一方を旧約のイザヤに擬するものがあれば、一方をエレミアに擬するものがある、声望から経歴から相対立した関西の組合教会の二人の伝道者（海老名弾正と小崎弘道）が通った。……青山と麻布にあるキリスト教主義の学院の院長（本多庸一）が通った。……京都にあるキリスト教主義の学校を出て、政治経済教育文学の評論を興し、若い世代の友として知られた平民主義者（徳富蘇峰）が通った。……そのうちにすぐれて広い額にやわらかな髪を撫でつけたセンシティブな眼つきをした学士が人を分けて通った。

『ああS（大西祝）さんだ』

と捨吉は言って見て、菅と顔を見合わせた。」

ここに登場するキリスト教会の指導者としては、牧師、伝道者として、植村正久、海老名弾正（1856-1937）、小崎弘道（1856-1939）、キリスト教学校の指導者として、東北学院の押川方義、青山学院の本多庸一、宣教師のフルベッキ、若くして名声を得た徳富蘇峰、それに元良勇次郎（1858-1912）、大西祝（1864-1900）といった学者がおります。元良と大西は、どちらも同志社の出身で、元良勇次郎はアメリカに留学し、ジョンズ・ホプキンス大学から博士号を取得しています。この時期は青山学院で教え、その後東京帝国大学に移りましたが、元良は日本最初の心理学者といわれています。また、大西祝は同志社から東京帝国大学に移り、早くから倫理学者として名声を得ておりました。こうした顔ぶれのなかで、プロテスタントの勢力が明治の社会に

次第に地歩を固めつつあることが知られるわけです。

徳富蘇峰は自分が創刊した日本最初の総合雑誌である『国民の友』12号で、キリスト教は、日本でも「婦人と少年とを味方」として、組織的に活動を開始している。キリスト教は少数派ではあるが、多くの知力と財力を持ち、社会の進歩の一大勢力となっている、と指摘しています。同誌35号では、「同志社学生に告ぐ」として、「一国をして常に新鮮ならしめ、健全ならしむるものは」「少数者の力」で、その少数者こそ「一国の良心」である。その担い手こそあなたがたではないか、「真理を愛し、人を愛し、上帝（神）を愛」する、そうした人物を養成することこそ新島先生の志ではなかったかと、その志を受け継ぐことを訴えておりました。こうした徳富の発言の中に、当時、日本のプロテスタントが日本社会に積極的に貢献しようとしていた意気込みを知ることができるわけです。

プロテスタントが明治日本に多大の貢献をした分野に女子教育があることはいうまでもありません。その女子教育には女性宣教師の役割があったことはよく知られています。当時、アメリカでは大学教育を受けた女性の職場として、女性宣教師は開拓的な分野でした。意欲あるアメリカの女性たちは、男女差別なく働くことができる海外伝道に取り組んだのです。その女性宣教師の周りに塾のような学校ができ、女子教育が広がっていきました。青山学院の源流の一つ、女子小学校をはじめたドーラ・スクーンメーカー（Dore Scoonmaker, 1851-1934）もその一人でした。YMCAの夏期学校には第一回から、キリスト教の女子学校の生徒も参加したことは、新しい文化の息吹を伝えるものでした。島崎藤村が教えることになる明治女学校は海外の宣教団体に頼らない、独立した教育機関で、日本の女子教育に大きな貢献をしたことも知られております。本多庸一は、明治25年、箱根で開かれた第四回夏期学校の校長を務め、その後も何回か校長の務めを果たしました。明治二十年代に、「明治の青春」、明治のプロテスタントが教会、学校のみならず、政界それに学会、文学界に力を及ぼしつつあるときに、その元締的な役割を果たしたのです。

キリスト教の文学への影響も大きなものがあり、たとえば教会の讃美歌が日本の文学に影響を与えたことが指摘されています。島崎藤村の新体詩はその一つで、藤村は賛美歌を恋愛詩に改作したこともあったといわれています。あまり知られていませんが、実は本多庸一も讃美歌の翻訳を手がけ、詩情ゆたかなものを残しております。初代のプロテスタントは武士の出身が多かったことから、一部には詩吟のようなものならともかく、讃美歌を歌うことには抵抗があった人もいたようですが、本多庸一は積極的に讃美歌翻訳に取り組んだようです。今日の讃美歌の歌詞に近いものを一つ紹介しますと、讃美歌21の457番「神はわが力」をこんな風に訳しておられます。

「神わが城なり わがちからなるぞ  
くるしめるときに いとちかきたすけぞ

地うつり海なり やまはうごくとも  
われらはおそれじ 神まもるわれを

ひとつのかはあり みやこはたのしむ  
かしこはうごかじ 神はやくたすく」

本多庸一の説教も、演説も、日本語の世界に新しい表現をあたえたものだったのですが、それに詩の世界もあったことは知っておいてよいことではないでしょうか。植村正久は、本多は文学の方面でも成功したかも知れないと語っています。

## 五、世界の中の日本——キリスト者の使命

このように、明治二十年代の本多庸一は、「明治の青年」が社会の前面に登場しつつあるとき、みずから政界進出の道を断ち、より深い思想、信仰的な深みから、新しい政治制度を生かす教育、文化を創り出すことに尽力したのです。キリスト者の仲間、青山学院、明治学院、東北学院など、キリスト教信仰を基盤とする教育機関を整備しつつありましたし、男尊女卑の伝統の強い社会の中で、クリスチャンが女子教育の分野を開拓しつつありました。学問の分野でもキリスト教学校は日本を代表する一流の人物を輩出しつつありましたし、新聞や雑誌といったジャーナリズムの分野で、また芸術文芸の面でも、キリスト教の影響は目覚ましいものがあつたわけです。とはいっても、キリスト教徒は信徒の数ではわずかに数万、ごく少数派にすぎなかったわけですが、年若い人々に支持されたキリスト教の前途は明るいとも見られていたのです。

1894年7月、やはり箱根で開かれた第六回夏期学校では、内村鑑三（1861-1930）の「後世への最大遺物」という記念すべき講演が行われました。「私に五十年の命をくれたこの美しい地球、この美しい国、この美しい社会、このわれわれを育ててくれた山、河」、これに「何かを残して往きたい」、それもお金でも、事業でも、思想でもなく、「勇ましい高尚なる生涯」を残したい、この呼び掛けは大勢の人を励ましたことが知られていますが、私はこの「後世への最大遺物」の講演は、前途に希望を抱きつつあつたこの時代、「明治の青春」の明るい雰囲気をよく示すもののように思われます。しかしそれも束の間、この内村の講演が行われたのが明治27年の7月で、そ

の翌月8月には日清戦争が勃発することになります。

維新後の新しい日本が国内的には明治憲法によって体制が整えられたとすれば、対外的関係、国際関係はこの日清戦争によって重大な局面を迎えることになります。日清戦争とその十年後の日露戦争は、日本国が国際社会においてどのような地位を保ち得るかを決する重要な事件でありました。今日から見れば、戦前の日本の近代史は対外的な膨張の歴史であって、アジアへの進出の歴史、侵略の歴史として語られています。しかし、日本は最初から周囲から一目置かれる強国であったわけではなく、維新後、日本国が独立を保持しうるかどうかは決して自明のことではありませんでした。南北戦争を勝利に導いた北軍の将軍で、後の18代大統領グラントは、世界旅行の途上で日本を訪れた際、レセプションのあいさつのたびごとに、日本国の独立を祈願する旨の発言を行ったそうです。また、グラントは明治天皇に助言した際には、日本を当時の半独立国であったエジプトと比較し、そのようになってはならないと注意を与えたといわれています。

たしかに、欧米の先進国との関係でいえば、日本は必ずしも一人前の国家とは扱われていませんでした。すなわち、欧米諸国との条約においては、外国人に対する治外法権が認められ、また日本の関税の自主権が否定されていました。治外法権というのは、外国人が滞在国の裁判管轄権や行政権から免れることを意味しています。現在でも、外交官は外交官用のナンバーの乗用車に乗り、交通違反しても訴追されないのではないかと思います。治外法権の状態では、外国人一般が日本国の裁判権の外にあることになります。これは欧米諸国から見れば、日本国は未開国で、法制度や裁判制度が整っていないので、自国民を日本政府にゆだねることができないことを意味しています。したがって、明治政府にとっては日本国を文明国にして欧米諸国に認めさせることが大問題でした。欧米諸国に対して日本国が一人前の国となるには、この不平等条約の改正が大問題でした。

他方、明治新政府は近隣諸国との間で安定的な関係を築くことも大きな問題でした。維新以来、朝鮮半島との関係は終始ギクシャクしており、清と日本との間では、島々を巡る国境線も明確ではありませんでした。この日清戦争について、内村鑑三が英文で「日清戦争の義」という文章を書き、日本の立場を世界に訴えたことはよく知られています。日清戦争は朝鮮半島を影響下に置こうとする日本と清の間の対立でありました。とくに、朝鮮国内で東学党の乱がおきると、清が宗主国として朝鮮を支配しようとしたのに対して、日本は朝鮮の独立の保全を掲げて出兵したのでした。内村鑑三はその日清戦争を、文明史的な視点から、文明と野蛮の戦いと見ました。

内村鑑三はこう考えました。日清戦争とは、新文明を代表する日本と旧文明を代表

する大国清との戦いである、それはあたかも、古代におけるギリシアとペルシアの戦い、近代初頭におけるエリザベス女王の英国とフィリッパ二世のスペインの戦いのようなものではないか。新興国ギリシアはアジアの大国ペルシアを打ち倒すことによって、古典古代の新しい文明を切り開いた、近代初頭の島国でプロテスタントのイギリスも、カトリック教の牙城スペインと闘いアルマダ海戦で勝利することにより、近代文明への道を切り開いた。日清戦争もそうである。日本が勝利すればかならずや、アジアの国々に、自由政治、自由宗教、自由教育、自由商業をもたらすであろう、というわけです。

日清戦争における日本の勝利は朝鮮半島の安定と領土の拡大をもたらし、日本国の安全に寄与することになりましたが、より大きな火種を残すことになります。清から割譲を受けたはずの遼東半島は、ドイツ、ロシア、フランスの三国干渉により清に還付することを求められます。これは混乱し弱体化した清にたいするヨーロッパ各国の領土的野心の表現であり、とくにシベリア鉄道を完成させ、東北アジアで南下政策をとるロシアが、日本の前に大きく立ちのびてきたことを意味しています。事実、その後日本とロシアは旧満州および朝鮮半島をめぐる、それぞれの権益の拡大を目指し、結局は日露戦争が勃発することになります。この日露戦争に対して、内村鑑三が非戦論を展開し、戦争反対を唱えたことはよく知られます。しかし、本多庸一は、当時のキリスト教会の多数の人々と共に、日清戦争を支持したのと同じ理由で日露戦争を支持しています。

本多は日露戦争について、内村鑑三の非戦論も意識しながら、「一、自国の存立のために戦う者、二、友国の保全のために戦う者、三、一時の戦乱を以て、永遠の平和を期し、少数の死を以て多数の生命を救い、進歩幸福の道を開く者」とし、この場合は、義戦であるとしています。ヨーロッパの大国ロシアが強大な軍事力を背景に、露骨に日本の大陸および朝鮮半島の権益を脅かし、ひいては日本国全体の存立を脅かしている、日露戦争はアジアの新興国にして小国日本が、やむにやまれずして自己の存続をかけて戦うものであるとしたのです。ロシアは清とおなじく、頑迷な老大国であり、思想信仰の自由も確保されていない。本多は、内村鑑三が日清戦争を義戦としたときと同じ論法で、すなわち、文明的な小国日本が、野蛮な大国ロシアに戦いを挑んだものと考えたのでした。日清戦争の場合と同じく日露戦争の場合も、世界の世論は日本に好意的であり、戦争の見通しという面では、日本の勝利を予想するものは少数派でした。

この時期、本多庸一は、明治学院院長の井深樞之助とともに、桂首相に要請されて、ヨーロッパ諸国で日本の立場を弁明する役割を引き受けています。桂のブレイン

には、さきに触れた「明治の青年」の一人、ジャーナリストの徳富蘇峰がおり、おそらく徳富の発案で、世界キリスト教青年会世界大会に出席する本多と井深に、その役割が依頼されたのでした。また、当時の外務省の高官に、弘前で本多とイングに学びアメリカ留学した珍田捨巳もおり、具体的には珍田と本多の間で相談が行われました。今日から見れば、本多の役割は日本の帝國的進出を思想的に手助けしたもののよう

に受け取られるもので、本多先生も武士の出身で、戦争で血の気が騒いだと考える向きもあるかも知れません。しかし、本多はあくまでも文明国日本を守ること、近隣諸国とも文明的な関係を築くという枠組みで考えていたことは忘れてはならないでしょう。

本多庸一は日露戦争を義戦として戦うには、正義の名だけでなく正義の実がなければならぬといひます。また、正義の形式を掲げるには、正義の精神が必要であること、さらに対外的に義を求めるのであれば、国内においても、また個人の生活にも正義がなければならぬといひます。本多庸一は日露戦争を、血が騒ぎ興奮して支持したわけでもありませんし、戦争に伴う国内の道徳的墮落に目をつぶっていたわけでもありません。本多にとって戦争の遂行は、伝道への課題を突き付けるものでした。「義は国を高くし、罪は民を恥かしむ。」この箴言の言葉を引用しながら、本多は戦時にこそ伝道の必要を訴えています。すなわち、人間は自分の力で義を遂行することはできない。キリストの名を呼び求めよ。本多にとっては、キリストに従う神の国の国士こそが、文明国の国士となる道であったのです。

## 六、まとめ

以上、クリスチャン国士本多庸一の活動について、明治十年代、二十年代、三十年代と時代を追ってお話ししました。本多がキリスト教を受け入れたのは自分一個の救いというだけでなく、日本国の救い、新しい日本の建設という祈りがありました。本多は教会を超えて、キリスト教学校を超えて、日本社会全体を、キリスト教を基盤に文明化へと導くことを念願していました。明治十年代の本多は、故郷弘前で、東奥義塾と弘前教会、それに民権結社「共同会」に関わり、地域社会において学校と教会を基盤に文明の諸事業を推進し、また、国会開設運動に尽力し、地方議会で議員として、後に議長として活躍しました。明治二十年代には、東京にあって、青山学院とメソジスト教会の指導者として、またひろく日本のプロテスタント教会の指導者の地位にあって、プロテスタント青年の活動を支えました。プロテスタンティズムで育った青年たちは、学問において、文芸において、あるいは教育において新しい文化を創造しつつあり、こうした活動は新しく出発した明治憲法体制とともに、新しい日本を築

きあげていくものと期待されていました。さらに、日清戦争と日露戦争にあっては、東アジアに文明的な国際秩序を作り上げていくものとして日本の戦争を積極的に支持しています。日清、日露の勝利は、頑迷な旧大国を打倒することによって、清国、ロシアの国民にも文明の光を与えるものと評価されていたのです。

しかし、クリスチャン国士本多の活動をこのように描きだすことは、明治日本をあまりに美化するとの印象が残るかも知れません。確かに、明治憲法は自由民権運動を踏まえたものではなく、天皇の名によって与えられたものであり、内村鑑三不敬事件に見るように、日本の天皇は、ヨーロッパの立憲君主とは同一視できない性格をもつものでした。さらに、夏期学校で見られたプロテスタント文化も、進化論をめぐる問題に象徴されるように、ほどなくキリスト教信仰と学問の間に緊張が生まれ、さらには教会で洗礼を受けた文学者たちの教会離れが見られるのも時間の問題でした。それに、日清・日露の戦争も、その後の日本のアジア大陸への進出から振り返れば、文明の戦いというよりも、日本帝国の膨張政策の一面に過ぎないという評価も下しうのです。その意味では、明治の終わりとともに亡くなった本多庸一は、よい時期に亡くなったといえないこともありません。本多は独立がおぼつかない新日本の出発にあって、キリスト教と文明の旗を掲げ、日本の教会、社会、国家に貢献し、もちろんさまざまな課題を抱きつつも、みずから走り抜いた旅路にある満足で振り返ることができたのではないのでしょうか。

では、今日の時点から本多の活動をどう見るができるでしょうか。経済の指標でも、政治の指標でも、今日日本はどこから見ても先進国に他なりません。一国の独立を心配することはない。また、この青山学院をはじめキリスト教学校も日本の教育界において確かな評価を得た私立学校として存続しています。では、キリスト教会はどうか。本多が入信したおりの十数人の教会からすれば、プロテスタントとカトリックを合わせて100万を超える信者がいるとすれば、大きな成長を遂げたともいえますが、社会的な存在感でいえば、決して向上しているとはいえません。ある高校生がアメリカにいて、日本のクリスチャンの数が1パーセントに満たないと言って驚かれたそうです。フセイン政権下のイラクでクリスチャン人口が3パーセントであったそうですが、たしかに、イラクよりも日本にクリスチャンの数が少ないことをどう考えるべきか。確かなことは、現在の日本の政治、経済、それに文芸などさまざまな文化活動において、本多庸一の時代よりはキリスト教の影響力は大きくはないということです。

では、明治の初めに本多庸一が日本国のためにキリスト教が不可欠であると考えたことは間違っていたのでしょうか。あるいは、それは発展途上の日本には当てはまる



が、大国となった現在の日本には当てはまらないものと考えるべきでしょうか。それに、キリスト教抜きの日本の近代化が、むしろ世界の人々の関心を引いている気配もあります。非キリスト教世界日本の近代化の成功は、同じく非キリスト教世界の国々の近代化に示唆するところがあると考えられるからです。

しかし、戦前の日本の歴史から知られることは、日本は小国で学ぶべき模範国があるときは上手くいくが、大国になって模範国がなくなったときに危ういということです。失われた十年とか二十年とかいわれる、日本経済の現状はまさしくそのように説明できるかも知れません。日本政府には確たる基本方針がないのです。原子力政策、貿易政策、福祉政策に基本方針があるのか。模範国がある限りはそれに追いつき追い越せができるが、模範国がなくなると日本の針路には霧が立ち込めて視界が不明になることはないでしょうか。

日本政府には基本方針がない。しかし、基本方針がないと批判する野党にも基本方針がなく、同じく批判するマスコミにも実はそれがない。私の知る限り、日本の近代史でこの問題を最初に指摘したのは、日清戦争後の内村鑑三です。内村は自分の利益を考え、いつも利益の計算をしているだけでは、基本方針は生まれない、ある場合には、自分の利益を犠牲にしても貫かねばならない原則がないと基本方針は生まれないといいます。「義にまさりて利を愛する者、天理にまさりて国を愛するものに大方針のあるべき筈なし。」これを本多庸一の言葉でいえば、日本国の国土となるには、神の国の国土でなければならないということです。神の国の国土となる、キリストに従う者となる、クリスチャンの国土となつてはじめて、文明日本の国土となることができる。世界に貢献する日本、愛と正義の日本を築くことができるということです。

クリスチャン国土たんとした本多庸一の生涯と活動は、確かに今日も生きているといえるのではないのでしょうか。

本講演は、2012年10月27日に、青山学院大学公開講座「本多庸一、人と時代」第五回として、本多記念国際会議場で行われたものです。